衣生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てる日常着の手入れの指導の在り方

－第６学年「暑い季節を快適に」の実践を通して－

西予支部

１　研究の視点

⑴　実感を伴った理解を促す実践的・体験的な活動の充実

⑵　考えを深めるための言語活動の充実

２　実践事例

⑴　題材名　「暑い季節を快適に」

⑵　目標

○　すずしい住まい方やすずしい衣服の着方や手入れに関心をもち、快適に過ごそうとする。

○　すずしく住まう方法やすずしい衣服の着方や手入れの仕方を工夫する。

○　すずしい衣服の着方や手入れ、快適な住まい方が分かる。

○　洗濯の必要性が分かり、手洗いを中心とした洗濯ができる。

⑶　題材設定の理由

○　本学級の児童（５年生１名、６年生２名）は、家庭科の学習に意欲的に取り組んでいる。全員が「家庭科は役に立つ教科である」と答えるほど、家庭科の有用性を感じており、そこから主体的に学ぼうとする姿勢が見受けられる。

事前のアンケートで「洗濯をしてみたいですか」と聞いたところ、全員がしたいと答えた。その理由として「自分の服は自分で洗いたい」「将来、役に立つ」などを挙げていた。また、全員が洗濯機の使い方を知っていると答えた。一方、手洗いの仕方を知っている児童は、一人しかいなかった。また、実際に洗濯をしたことのある児童も一人しかいなかった。アンケートの結果から、意欲はあるが、経験が乏しいことが分かった。

○　本題材は、日常着の着方や手入れに関する実習などを通して、衣服への関心を高め、着方や手入れの基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けること、そして、目的に応じた快適な着方を考え、工夫する能力を養うことをねらいとしている。

特に「衣服の着用と手入れ」の内容については、布の性質調べ、洗い方の違いによる比較など、実践的・体験的な活動を十分に取り入れることで、衣服の手入れの仕方等について理解を深め、生活を快適に過ごすための基礎的・基本的な知識や技能の定着を図ることができる。

○　実際の指導に当たっては、児童は洗濯の経験が少ないので、体験活動を多く取り入れたい。そして、「洗濯名人になろう」という明確な目標をもたせることで、より効果的な洗濯の仕方を考えさせたい。また、家庭での聞き取り調査を行うことで、普段何気なく見ている家族の仕事にも関心をもたせたい。さらに、学習したことを家庭で実践させることによって、家族の一員として自分にもできることがあるという自己有用感も実感させたい。

本時は、３つの実験を通して、「洗濯名人」になるためのこつを見付けさせることをねらいとしている。①「洗剤の量」については、事前アンケートにおいて「家の人が気を付けていること」として、二人の児童が書いていた。しかし、どれくらいの洗剤を入れたらいいのかは知らなかった。なぜ、家の人は洗剤の量に気を付けているのか、どれくらいの量を入れたらいいのかを、実験を通して理解させたい。②「水の温度」については、手洗いのよさとして、「湯で洗うこと」と答えた児童がいた。しかし、理由までは答えることができなかった。水の温度によって汚れの落ち具合が変わるのかを、実験を通して理解させたい。③「道具」については、洗濯機を使う家庭が多く、道具を使用して手洗いをする機会は少ない。そこで、道具を実際に使うことで汚れが落ちやすくなることにも気付かせたい。個々での実験終了後に分かったことを互いに報告し合うことにより、全員で共通理解を図りたい。

⑷　指導と評価の計画（全８時間）

過程	時間	ねらい	学習活動	評価規準・評価方法			
				関心・意欲・態度	創意工夫	技能	知識・理解
出合う	３	すずしい住まい方について課題を見付け、観察	暑い季節の住まい方や着方を見つめる。	暑い季節に合わせた生活の仕方	すずしい住まい方について課題		すずしい住まい方について分かる。(ノ

		や実験を通して、考えたり工夫したりすることができる。	すずしく住まうための工夫について調べたり、実験したことをまとめて発表したりする。	に関心をもち、快適な住まい方について考えようとしている。(発表)	を見付け、観察や実験を通して考えたり、工夫したりしている。(ノート)		ート・テスト)
とらえる	1	衣服を清潔に気持ちよく着る方法を考え、すずしい着方が分かる。	暑い季節を気持ちよく健康に過ごすための衣服の着方を考える。		すずしい着方について考えたり、自分なりに工夫したりしている。(ノート)		衣服の保健衛生上の働きが分かり、気温や季節の変化に応じた着方が分かる。(ノート・テスト)
考える	4 (本時その3)	衣服を気持ちよく着るための衣服の手入れに関心をもち、洗濯の必要性が分かる。 洗濯の仕方に関心をもって、手順などを調べる。 手洗いを中心とした洗濯の仕方が分かる。	衣服の汚れについて調べ、洗濯の必要性を考える。 手洗いと洗濯機の違いや手洗いの手順を調べる。 課題を解決するための実験実習をする。	衣服の汚れの落ち方について関心をもって調べ、洗濯に興味をもっている。(ワークシート・観察)	課題を解決する方法を考えたり、自分なりに工夫したりしている。(ワークシート・観察)		手洗いの仕方が分かる。(ノート・テスト)
生かす		洗濯の実習計画を立て、計画に沿って手洗いによる洗濯ができる。	自分の衣服を洗濯する実習計画を立て、自分の衣服を洗濯する。			衣服に合った洗濯をすることができる。(観察)	

⑸　本時の指導

ア　目標　　洗濯名人になるためのこつを見付けるために、自分なりに工夫して実験している。

イ　準備物　　ワークシート　掲示物　布　バケツ　洗剤　歯ブラシ　洗濯板　桶

ウ　展開

学習活動	○主な発問・予想される児童の反応	○指導上の留意点◎評価
1　本時の課題を確認する。	洗濯名人になるためのこつを見付けよう。	○　家庭での調査を基に課題に取り組ませる。
2　実験の手順を確認し、実験を行う。	○　よりよい手洗いの仕方について考えよう。 【実験１】洗剤の量 ○　洗剤の量を変えるとどうなるのだろう。 ・洗剤はたくさん入れたほうが、よく落ちると思うよ。	○　予想は全員で行い、実験は一人一つを担当させる。 ○　洗剤なし、標準、使用量の２倍の３つの条件で実験を行うようにする。その際、すすぎにどれくらいの水を使ったかをメモさせる。 ○　洗剤は使用量の目安以上使用しても汚れの落ち方は変わらないことに

	【実験２】水の温度 ○　ぬるま湯で洗うと、どうなるのだろう。 ・水の温度は関係ないと思うよ。 【実験３】道具 ○　洗濯板を使ったり、ブラシを使ったりしたら、どうなるのだろう。 ・道具を使った方が、よく落ちるよ。	気付かせる。 ○　水とぬるま湯で違いを比べる。 ○　ぬるま湯を使うと汚れが落ちやすくなることに気付かせる。 ○　もみ洗い、洗濯板使用、ブラシ使用の３つで違いを比べる。 ○　道具を使うと、汚れを楽に落とすことができることに気付かせる。 ◎　課題を解決するために、自分なりに工夫して実験をしている。（創・工/ワークシート・観察）
３　実験で分かったことをまとめる。	○　実験で分かったことをまとめよう。	○　まとめたものを報告できるようワークシートに結果をまとめさせる。
４　実験で分かったことを報告し合う。	○　まとめたことを報告しよう。 ・洗剤は量を守るべし。 ・ぬるま湯を使うべし。 ・道具を使うべし。	○　実験で気付いたこつを報告し、キャッチフレーズにまとめさせる。
５　今日の学習を振り返る。	○　今日の学習を振り返って、まとめを書こう。 ・洗剤、洗い方、道具を工夫すると、よりよい洗濯をすることができる。	○　今日の学習を生かして、次時に洗濯実習をすることを伝え、意欲を高める。

⑹　活動の実際

ア　実感を伴った理解を促す実践的・体験的な活動の充実

(ｱ)　実験的な活動の設定

○　吸水実験

洗濯の必要性に気付かせるために、導入段階で、洗濯の有無による吸水実験を行った。洗った布も汗を吸い取った後の布も見た目には変わらない。服も同じで、一度着たかどうかは見た目には分かりにくく、洗濯をする必要性を感じにくい。しかし、洗った布だと水がどんどん染みこんでいくのに対し、汗を吸い取った後の布は、なかなか水を吸い込まなかった。この実験を通して、汗を吸い取った後の布だと吸水性が悪くなることを視覚的に捉えることができ、洗濯の必要性に気付くことができた。

○　洗濯実験

まず、本時の前に汚れの落ち方実験を行った。汚れを一日置いたものと今汚れたもの、どちらが落ちやすいかを予想し、その後、実際に手洗いをしてみた。実験を通して、そのままにしておくと汚れは落ちにくくなり、すぐに洗うことが大切であるということを理解することができた。また、部分的に汚れているのであれば、洗濯機ではなく、手洗いをすると手軽にできるということも併せて理解することができた。

＜写真１洗濯実験の様子＞

そして、本時では、綿の布に墨汁をつけて１日置いた場合、どうすればより落ちやすくなるのかを洗剤の量、水の温度、道具の３観点で実験を行った（写真１）。予想では、洗剤をたくさん使った方が汚れが落ちやすくなると答えていた児童が多かったが、比較してみると汚れ落ちは変わらないことが分かった。逆に、洗った後、泡がなかなか取れないことから、洗剤の量は守らないといけないということに気付くことができた。また、湯を使ったりつけおきをしたり、ブラシや洗濯板を使ったりとそれぞれの家庭の工夫を実験で試してみることで、家の人がしている工夫の意味を実感を伴って理解することができた。

(ｲ)　インタビューを取り入れた学習

家庭での聞き取り調査を取り入れ、家庭での洗濯の様子を観察させた。事前アンケートによると、全員が、家の人の洗濯する様子を見たことがあると答えていた。しかし、洗濯の手順や家の人が気を付けていることについてはほとんど知らなかった。インタビューを通して、家庭での洗濯の様子にも目を向けさせることができ、洗濯をより身近なものに感じさせることができた。

(ｳ)　ＩＣＴの活用

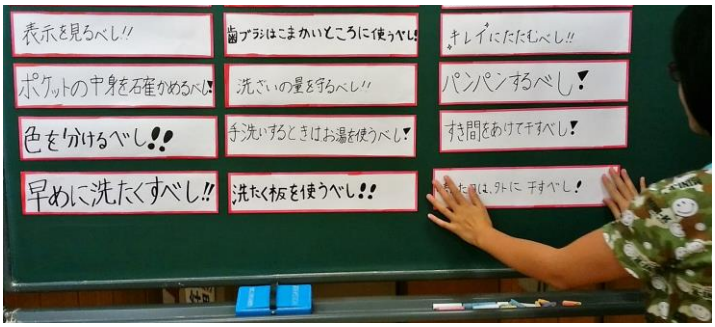
洗濯実習を行う前に、いろいろな洗い方の動画を見せた。動画を見せることにより、それぞれの洗い方の特徴を視覚的に理解することができた。また、「この洗い方を試してみたい」「この洗い方だとどれくらい汚れが落ちるのかな」「早く洗ってみたい」という声が上がり、意欲の向上にもつながったと感じている。

洗濯実習では、自分の履いている靴下を手洗いした際に、洗濯前の写真と洗濯後の写真をタブレットで撮影し、汚れの違いを比べさせた。洗っている時は、「汚れが落ちているかどうか分からない」と言っていたが、洗濯前と比べてみると、「すごく落ちている」「こんなにきれいになったんだ」「手洗い、すごい」と驚いており、手洗いでの洗濯の有用性を実感することができた。

イ　考えを深めるための言語活動の充実

(ｱ)　キャッチフレーズを使ったまとめ方

「洗濯名人になろう」という明確な目標を設定し、名人になるためにたくさんのこつを見付けさせた。その際、見付けたこつを「～すべし！」で終わる短い文章（キャッチフレーズ）で表現するようにさせた。キャッチフレーズを使ってまとめることで、気付いたことを整理し、より相手に分かりやすく、簡単に伝えることができていた。キャッチフレーズは毎時間黒板に貼り付け、授業を終えるごとに増えていくようにしたため、どんどん「洗濯名人」に近付いていることを実感させることができたようだった（写真２）。



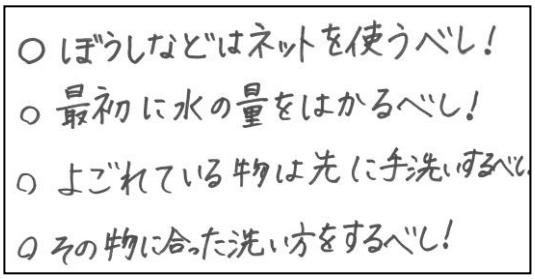
＜写真２　洗濯名人になるためのこつの掲示＞

(ｲ)　一人一実験による伝え合い活動

本学級の児童は３名と少ないため、本時では、一つの実験を一人でせざるを得なかった。実験の予想は全体で行ったが、実験結果はそれぞれの児童が責任をもって、他の児童に伝えることにした。実験終了後には、気付いたことや分かったことをワークシートにまとめさせ、それらを伝え合う活動を行ったことで、共通理解を図ることができた。

３　成果と課題

児童は、実験やインタビューを通して、たくさんのこつを見付けることができた。また、キャッチフレーズを使ったことで、意欲的にこつを見付けようとする態度も見られた。それは、授業だけでなく、家庭での実習でも生かされていた。夏休みに洗濯実習を課題に出したが、実際に洗濯をする中で、新たなこつを見付けることができていた（資料１）。こつを実際の生活に生かすことができたことで、児童は達成感や満足感を味わうことができ、洗濯への意欲がより高まった。何より、洗濯をしたことのなかった児童も自信がつき、本授業終了後には、全員が「洗濯名人に近づけた」と答えることができた。



＜資料１　児童のワークシート＞

今後は、学校での学びを日常的に家庭で生かすことができるように、長期休業だけでなく、普段の休日を利用しての実践ができるように更に意欲化を図り、家庭との連携を深めていきたい。